

【連載】

老健仕事人  介護福祉士

介護職員としての 自覚と葛藤

[第2回]



小山大介 [こやま だいすけ]

介護老人保健施設せんだんの丘(宮城県)
介護課長

認知症専門棟編②生活環境

生活環境の構成要素には「人」も含まれるが、たった1人でも良いので、困ったときに話を聞いてくれたり、頼りになる人がいれば、それだけでもうんと安心だ。

他職員が利用者の対応に困惑していたり、逆に不適切な対応をしていると感じれば、「自分の出番だ」とアドレナリンが出た。入職して5年、6年と経つにつれ、良くも悪くも影響力が出てきた。利用者だけでなく、職員にとっても頼りになる存在でありたいと思いつつも、認知症ケアの知識や技術は乏しく、「思い」だけではうまくいかないことが多かった。

「本人が安心できる環境をつくる」など、それっぽい目標だが、具体的にどうすれば利用者が安心できるのか?はとても難しい。往々にして「職員が安心できる環境」になりがちだ。現実的にそうせざるを得ないさまざまな状況もあるのだが、「この場所で生活したいか?」「自分は利用者にとって安心できる存在なのか?」を改めて考えてみると、環境づくりのヒントが得られることも多いはずだ。

認知症専門棟編③センス

「センスがない」。言われたら傷つく言葉だが、実際に言われたことがある。

認知症には、「中核症状」といわれる核となる症状が何かしらあるとされ、その1つが「見当識障害」である。文字どおり、時間・場所・人などの見当がつかなくなる症状だ。当施設では、介護職員がケアマネジャー、多職種と連携しながらケアプランの作成を行うのだが、自分が担当していた男性利用者が他者の居室にたびたび出入りし、トラブルが頻発した。本人にはなんの悪気もなく、自分の部屋を探しているだけなのだが、特に女性利用者から「ドロボー」などと

大声を出され、他利用者の BPSD を助長する要因にもなっていた。

これには、大規模施設特有の環境も影響している。扉の作りが同じなので、居室なのかトイレなのか、一見わからず、認知症の人でなくても迷子になりそう。各居室の入口には表札が設置されているのだが、近づかなければ認識できない控えめなサイズだ。そのため、各担当者が居室入口にその方にとって認知しやすい目印をつけるのだが、どの居室も同じような飾りや表札が増え、利用者の表札が目立たないような状態になっていた。

そこで、居室の扉に「〇〇〇〇様のお部屋」と模造紙にでかかど書いて掲示した。「自分の名前」は認識できていたので、掲示してからは、予想どおり部屋を間違えることがなくなった。

数日後、その居室の前で普段ユニットに顔を見せることなどほとんどない介護課長が、主任と何やら話していた。ほめている(?) 雰囲気ではなく、間もなくその模造紙を剥がし始めた。納得がいかに課長に詰め寄ったのだが、そのときに言われた言葉が「センスがない」だった。全否定されたような気がして感情が抑えられず「センスがないんです! すいません!」と声を荒らげ、上司に反抗的な態度をとった。

センス=才能ではない。良いとされる基準、悪いとされる基準をいろいろと見て聞いて、感じて、実践していくなかでセンスは磨かれる。自分ではこれが良いと思って表現したものが、周囲からすれば微妙だったりするものだ。そんなとき、正しい評価をしてくれる職場環境であることは重要だ。そういう意味では恵まれていたのだろう。

当時の自分に、介護課長であるいまの自分ならどのように声をかけるだろうか。「センスがないね」とだけはくれぐれも言わないようにしたい。